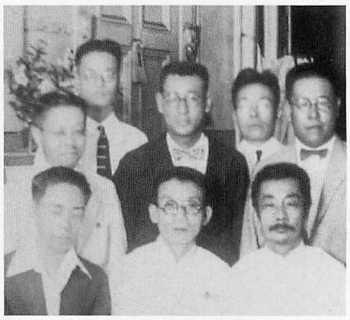
林芙美子と魯迅 そして内山完造

久保卓哉

芙美子は二度魯迅と会っている。二度とも上海内山書店の内山完造の紹介であった。一度目は一九三〇年九月、『放浪記』の印税によって哈爾浜（ハルビン）、長春、奉天等の満洲と上海、蘇州、杭州の南支を旅した時で、二度目は一九三二年六月、巴里からの帰途に上海に立ち寄った時である。

芙美子が魯迅について書いた最初のものは、一九三五年八月の『文學界』に発表した「日記」で、これが掲載された時、魯迅はまだ元気に執筆を続けており、日本の『改造』に「現代支那に於ける孔子様」を寄稿し、また『故事新編』を出版するための「序言」を書いていた。この「日記」は『放浪記』のスタイルで書いた作品で、「魯迅氏の『魯迅選集』を貰ふ。魯迅氏に逢つたのは一九二九年の秋と、一九三二年の欧洲よりの歸へり、つゝましい生活をしてゐられた。（略）魯迅氏へ長い手紙を書いた」というのがその内容である。

次は『改造』一九三七年四月号に書いた「魯迅追憶」で、前年の十月に病逝した魯迅を哀惜している。



芙美子の宴で詩を書いた作家たち。前列左から田漢、郁達夫、魯迅。後列左から二人目鄭伯奇1930年8月6日撮影（『魯迅家庭大相簿』同心出版社より）

「魯迅氏にお目にかゝつたのは昭和五年の秋である。内山完造氏のご紹介で上海に着いた私の爲に歓迎の宴が張られた時、あつまつて下すつた方に、魯迅氏、郁達夫氏、田漢氏、鄭伯奇氏、白薇さん、こんな方がゐらつしてゐた。その會が果てる頃、みんなの方が詩を書いて下すつたが、魯迅氏は私のために唐詩選の中の二十五絃と云ふ詩を書いて下さり、「阿Q正傳」と云ふ本を贈られた。（略）昭和七年の六月マルセイユからの帰へり、船が上海に寄つた時、私は魯迅氏を再びお尋づねした。子供さんや若い奥さまにも初めてお目にかゝつたが魯迅氏は上海事件の後のせいか非常に疲れたやうな顔をしてゐられた」。

芙美子のこの「魯迅追憶」は重要だ。「二十五絃と云ふ詩」とは唐・錢起の七言絶句「歸雁」で、魯迅の書は芙美子によって軸装され今も新宿歴博に保管されている。「歓迎の宴」とは内山完造がわざわざ隣の家を借りて設けた宴で、同席した作家には郁達夫、田漢、鄭伯奇、白薇がいたことが分かる。白薇は三十六歳の女性作家であり、郁達夫など三人はいずれも東京大、東京高等師範、京都大を卒業した面々である。

芙美子が魯迅と会ったことは、魯迅の日記にも書かれている。一九三〇年九月十九日「晩、内山、隣家を借りて宴席を設け、林芙美子を招く、余も誘わる、同席者約十人」。一九三二年六月十二日「日曜。雨。昼まえ、林芙美子来る」。我々は魯迅の日記によって芙美子が魯迅と会った年月日が分かる。そして、内山完造が初めて上海に来る日本の女流作家を迎えるために、周到な準備をしたらしいことが分かる。十人というからその賑やかさは相当のものであったにちがいない。なぜなら、銘々に筆を持ち、詩や書を書いて見せあう文人たちの宴だ。書の意味を説明し、それを聞いて感嘆する歓声と笑い声が、上海の夜にこだましたらしいことは容易に想像がつく。

芙美子はこの時どういう言葉を書いて魯迅たちに見せたのだろう。

私の推測だが、書いたとすれば「黍畑」の一節だろう。「細々と海の色透きて見ゆる／黍畑に立ちたり二十五の女は／玉蜀黍よ玉蜀黍！／かくばかり胸の痛むかな／二十五の女は海を眺めて／只呆然となり果てぬ」この最後の二行、「二十五の女は海を眺めて／只呆然となり果てぬ」を書いたにちがいない。これを見た魯迅が芙美子の「二十五」に想をえて、「二十五絃夜月に弾ず」の句をもつ錢起の詩を書いて唱和したと考えられるからだ。

内山完造宛の芙美子の手紙が出てきたと連絡を受けたのは、二〇一〇年七月であった。内山書店の内山籬氏からだった。この手紙については調査中なのでまだ詳しくは書けないが、北満ホテル（哈爾浜）の封筒とヤマトホテルの便箋を使って「上海北四川路底内山完造様」「奉天にて林芙美子1930・9・5」とある。女の一人旅で上海は初めてゆえ波止場まで迎えに来ていただけないか、という内容である。完造はこの手紙を見て、波止場に迎えるとともに、芙美子のホテルを予約し、歓迎の宴を開く準備をしたのである。この手紙はまた、新居格の紹介であること、完造と初めて接すること、そしてこの旅は八月何日に日本を出発したかということをも明らかにする。まさしく、新資料の発見だといえる。

（中国文学研究者）

発行2012年5月17日

現代女性文化研究所 ニュース No.32

The Contemporary Women's Culture Institute

題字／望月百合子

NPO 現代女性文化研究所
〒112-0011 東京都文京区千石4-32-6
電話 03-3941-1007　FAX 03-3941-7577
ホームページ：http://www.gjk-j.com
E-mail: gendai-j@almond.ocn.ne.jp
本紙は再生紙を使用しています。

林京子さんインタビュー
あの8月9日を生きのびて
「核と人間は共存などできません」

1945年8月9日午前11時02分、長崎の街を巨大なキノコ雲が覆った。広島に次いで人類史上2番目の原子爆弾がアメリカによって投下された。そして敗戦。爆心地から1・4キロ地点で被爆しながら奇跡的に生きのび、その鮮烈な記憶を1975年、小説『祭りの場』に凝縮して世に問うた作家、林京子さんにインタビューした。

（岡田孝子）

「あの8月9日が私の原点です。学徒動員中の三菱の兵器工場で被爆し、とにかく助かった。何もかも跡かたもなく消えてしまった松山町をみて、神様、命を私に与えてくださってありがとうございます。と本当に思いました。命一つ、その大切さをどんなに感謝したでしょう。それ以来、〝いのち〟を中心に書いてきました」

第77回芥川賞を受賞した『祭りの場』をはじめ、『無きが如き』『長い時間をかけた人間の経験』『トリニティからトリニティへ』など、8月9日をテーマに多くの作品を発表し、「被爆」を正面から取り上げてきた。奪われた命、生きようとする命。戦後の長い年月を置き去りにされてきた多くの被爆者たちの姿を、みずからの苦悩を重ねながら林さんは作品に刻む。

林京子さん、自宅で（神奈川新聞社撮影）。

1930年長崎に生まれ、上海で14歳まで過ごす。45年3月に引揚げ、学徒動員中に被爆。1975年、その体験をもとにした『祭りの場』で芥川賞受賞。以後、『上海』で女流文学賞、『三界の家』で川端康成賞など多数受賞。2005年には朝日賞も。

被爆を生きる

長崎に生まれてまもなく父親の勤務で一家は上海へ。敗戦間際の45年3月に長崎県立高等女学校に編入学。学徒動員中に被爆する。

「私がいた所は兵器工場のなかでも片隅のひどい環境でした。鼻がみや紙くずを再生するための粗末な小屋のような木造の建物。被爆後数分で火災を起こしました。でも、その木造が幸いしたのですね。コンクリート製の頑丈な建物に配属されていた友人は即死したり、下敷きになりました。大きな窓ガラスが粉々に飛び散って体の奥深くいくつも突き刺さったりした人もいました。」

当時、工場には7500人が働いていたが、そのうち6200人の生死が不明だという。

誰も助けてくれる人などいない。必死に逃げて段々畑の丘になんとか辿り着いたものの、焼死体と無残に焼けただれた人たちばかり。眼下の町、爆心地の松山町は、家も木も人